

原 著

思春期病に関する社会心理学的考察

永 丘 智 郎 ・ 那 珂 由 美 子*

A Socialpsychological Study of Pathological Crisis
in Puberty (= Adolescence Problems Syndrome)

CHIRÔ NAGAOKA and YUMIKO NAKA

序 言

——文明病としての思春期病——

思春期を含む青年期において、人生の基礎が定まることは確実であるが、思春期青少年少女の最も大きい特色は、何か——ある希望を抱いていて、それが達成されるかどうか不分明の段階にあって、簡単にあきらめてしまう短絡性を示すことである。一般的には視野が狭いとか、ねばりが足りないなどと批判されるであろう。

ゆえに“人事をつくして天命をまつ”のではなく、むしろ、何もしないで無謀な結論をだすに等しい。この傾向は、本稿に述べたあらゆる社会病理現象が、さらに拍車をかけることになる。

われわれにとって思春期や自殺は、決して無縁のものではあり得ない。思春期病を社会心理学の立場から研究してみようという理由は、古代ローマの全盛期に、やはり母子未分離などの近親間問題が多く発生した、という事実からである。人間のつくりだした文明社会が、再び人間に文化として還元される時、心理の面でも様々な影響が起こるであろう。

戦後ポツポツと現われだした思春期病。その存在は、昭和53年頃からマスコミによって、社会的にクローズアップされ、一気に表面化

した。その裏にあるものを第1章以下、順を追って究明したいと思う。

思春期病とは、歪んだ発達をしてきた子どもたちが、思春期の心理的混乱期に至って、噴きだす問題行動である。強迫神経症、登校拒否、対人恐怖、思春期やせ症、無気力症、自殺等々の症状があり、家庭内暴力との合併症も多い。

彼らの性格特徴は、①粘着性基調の内閉性。②模範生タイプ。③努力型で成績は上の方。④親に依存的で自己主張がない。⑤外面がよい。⑥建て前主義で本音がだしにくい。⑦自己防衛が強く本心をだしにくい。⑧周囲の評価に過敏。⑨リビドーが外へ向く外向性。⑩要求水準が高く、それは現実能力を無視したもの。⑪神経過敏、内気、内弁慶。⑫社会性が未熟で適応力が低い。⑬過保護・過干渉。⑭完全主義。⑮自主性がない。⑯反抗期がない。⑰自我が強い。——などがあげられ、多重人格だという病識を持っている。

第1章 子どもを取りまく社会環境が人格形成に及ぼす影響

1. 遊べなくなった子ども

子どもを取り巻く社会環境は、戦前と戦後で大きな違いがある。子どもにとって遊びは人格形成の上で重要な意味をもつ。ところが

* 甲南大学文学部心理学研究室

その遊びのスタイルが、変化しているのだ。ひと昔前は、子どもは、屋外で何人かの年齢もマチマチな仲間たちと、鬼ゴッコやメンコなど豊富な遊びを、身体を思いきり動かすことによって楽しんでいた。子どもたちの遊びへの参加は、自発的・能動的なものであったのだ。

そのような遊びの中で、子どもは健康で丈夫な身体をつくり、友だちとのつきあい方(社会性)を学び、友だちと協調しなければならないところから、欲求を押さえることを学び、自己表現を発達させていった。また、自然の中の石ころや棒きれをも遊びの道具とするため、創造性が養われ、やる気も育つ。そして何よりも、エネルギーを発散させることによって、精神的安定を得ることができたのである。遊びという重要な課題の中で、良心や責任感、自己統制力を学ぶことは、そのまま、1個人としての人格形成につながる。

ところが、現代の遊びは、どうであろうか。たしかに、色とりどりの豊富なおもちゃがある。テレビもある。しかし、遊びの内容そのものは、昔とは比べものにならないほど貧弱になってしまっているのではないか。都市化に伴い、広い遊び場は失われた。道で遊ぶにも車が危険。結局、家の中で遊ぶことになる。遊び仲間は少数、むしろ1人で遊ぶことも多い。テレビ、マンガ、コンピューターゲーム相手の遊びは、受身的で、身体を動かす必要が無い。人形遊びやプラモデルなど、子どもなりに楽しんでいるのだが、どうも遊びが画一的で、個性が無いように思われる。

現代の、孤独型遊びの増加は、「ギャング集団」(いたずらっ子の集り)の減少と表裏をなす。そういえば、われわれ自身、外で遊ぶ子どもたちの集団を最近見た、という記憶がない。これは、重大な意味をもつことだろう。ギャング集団の役目は、各々の子どもに、社会性・自主性など、人間形成の場を与えることにあるが、その集団が失われたとなると、子どもの人格が正常に形成されなくなるのではないだろうか。実際、思春期病になった子

どものほとんどは、社会性も自己表現も未熟で、内向的傾向をもっているのである。ギャング集団を見かけなくなったのは、孤独型の遊びが増えたためだが、もう1つには、子ども自身が、遊ばなくなったためでもあるのだ。

都市化は、子どもから遊び場を奪い、子どもは外で遊べなくなった。学校の校庭で遊ぶうにも、最近の小・中学校はマンモス化していて、思うように伸び伸びと振えないのが、現状である。ギャング集団が失われつつある現代、学校で多くの仲間たちと遊ぶことは、非常に重要だ。しかし、マンモス化した都市の学校では、狭い校庭で不自由している。仲間の間で一体感などを育てることは難しい。学校での遊びとはいっても、しょせん、教師の監視下で行われる時間制限付きの、貧弱なものでしかない。

また、子どもは両親の期待通り、勉強部屋にこもる「いい子」である。自宅学習や塾に追われる一日で、ゆっくり遊ぶ暇がない。総理府の資料「児童の実態等に関する国際比較調査」によれば、10~15才の子どもの生活時間において勉強時間を見ると、3時間以上のものが、日本19.7%、アメリカ4.7%、イギリス3.9%、フランス3.5%、タイ5.1%となっており、日本以外は極めて低い。遊んでいる時間についてみても、日本の子どもの遊び時間は、他国に比べて極端に少ない。

さらにその遊び内容は、各国とも「テレビを見る」が共通してトップだが、日本の児童はその次に「雑誌やマンガをみる」(64.2%)が多く、ついで「友だちと戸外で遊ぶ」(42.2%)である。ところが、アメリカやイギリス、フランスなどは、「友だちと戸外で遊ぶ」が、テレビをみるのと同程度に多いのである。これに「読書」(英、仏)や「音楽を聴く」(米)が続いている。日本の子どもは、遊びの時間も内容も乏しいようである。アメリカやイギリスのように、ギャング集団が存在していればよい。しかし、それは今や喪失し、画一的な自由時間を過ごしていることは、やはり精神発達が、おざなりになりやすいの

であろう。

2. 都市の刺激と知・情・意

経済の、高度成長期を経て、生活水準、文化水準が向上し、国民の間には「中流意識」が幅をきかせている。経済的に豊かになった日本国民。新製品を大量生産する産業界。そこに使い捨て文明が生まれる。マスコミの操作は人間に「使い捨て」を当然のごとく意識させ、次々と消費するようにしむけるのである。人間の方は、マスコミに操作されている自分に気づかないまま、流行を追い、主観的には個性的だが、客観的には画一的な生活パターンを過ごしている。

現代の子どもは、「物」のありがたみを知らない、などといわれることがあるが、この世の中には、数々のおもちゃが店頭に並んでいる。魅力的な菓子類も豊富である。子どもたちはみな平等にこれらの存在を知り——多くはTVや雑誌の広告で——親に買ってもらうなり、自分のこづかいで買うなりする。豊富な商品を前に、子どもは欲求を押さえることが難しくなる。欲求が達成されない場合、泣いたり暴れたりといった短絡的な自己表現しかできない子どもは、既に思春期病の条件を備えている。また種類豊富な商品が、次々と目の前に現われれば、気分も変わり易くなるであろう。そして、そのような育ち方をした子どもが、親となってきている時代となったことは、未熟な親をつくり出し、さらに彼らによって、人格の歪んだ子どもが、作られていくことは、悪循環としかいいようがない。ともあれ、この豊かな社会そのものが、子どもの欲求不満耐性の欠如の一要因であることは否めない。

都市の刺激によって、認知・情緒・人格が被る影響も、見のがせないだろう。映画・劇場・スピーカーから流れるアナウンス、極彩色の商品や看板、交通戦争による騒音、産業公害、等々——。都市環境は極めて複雑であり、人間に対して限りない刺激と挑発を送り続けるのである。子どもなら、なお一層、それらが無抵抗に受け入れてしまう。もっとも

それは、子どもにとって、殆んど無意識のうちに影響を与えるものだろう。それらを日常のものとして受けとめ、その刺激により、知的促進がなされ、活発で好奇心旺盛な傾向を育てる。刺激感受性は強くなり、反応用意性の高い、つまり認知の機能のうち、知覚・抽象作用などの発達した子どもになるのだ。その結果、神経過敏で、落ち着きのない傾向も生まれ、情緒不安定になる恐れもあるかもしれない。認知と情緒の影響は、人格にも現われる。

現代社会は、子どもに多くの刺激に対する適応能力を与えたが、それが裏目にでた場合に、心理的障害が起こるのではないだろうか。そしてさらに、都市の刺激は、強い都市もあるが、弱く慢性的に刺激を与え続ける都市の方が、量的には多い。弱く慢性的な刺激は、無意識に働きかける。気づかないうちに認知・情緒・人格の不均衡を招く危険性は、弱い慢性的な刺激の方が、高い。

過密都市で、刺激に対して過剰反応することにより、悲惨な事件も起きている。昭和49年8月28日には、神奈川県の新興住宅団地で起きた「ピアノ殺人」や同50年11月に仙台で起きた幼女殺人は、いずれも、過密によるイライラが原因で、短絡思考による病理そのものである。ストレス社会の現象として、誰でも被害加害者になる可能性はある。事実、家庭内暴力は、人口流入の激しい、都市部に頻々と発生し、沖縄など、地方では殆んど、発生していないのである。都市の「刺激」の見えない影響は、恐ろしいものである。

3. 社会集団とパーソナリティ

子どもの意識や、パーソナリティの、基礎的な社会化を育てる役目をもつ「家族」は、戦後憲法及び民法の改正に伴う伝統的「家」制度の廃止で、核家族化している。そして同胞数（きょうだい数）の減少ということも手伝って、子どもは親の愛情を一身に受け、自己中心性は、増長される。また、核家族化のあおりを受けて、育児方法を知らない母親が増加している。母親にとって、育児は不安で、

神経をとがらせるものとなる。子どもも、母親の状態を吸収して、母子ともに、不安な精神状態となることは、じゅうぶんに考えられる。

思春期病の要因として、もう1つ挙げられる社会集団は、学校である。第2次世界大戦後、教育制度は改められた。最初は、偏差値や知能検査などの、「ものさし」は存在しなかった。学力だけではなく、全人格的なものに対する、トータルな教育や評価が、行なわれていた。戦前の軍国主義、全体主義といった、一元的なものの影響は教育の場から消え、新教育理念を求め、教師が生徒と一体となって、教育理想を追求していたのである。戦後の教育史上最も自由な時代として、戦前の一元的価値体系から多元的価値体系へ転換したのだった。そのような自由の中で、教育的評価や人生の歩み方についても、多様性が許容されていた。

ところが、戦後のベビーブームに誕生した世代になると、このような理想的な教育とは無縁になってしまう。高度経済成長に伴い、国民の生活水準が向上・安定し、高等教育への進学率が増加するにつれ、受験戦争が激しくなっていった。IQ値や偏差値の導入が、受験戦争に拍車をかけ、さらに社会的選別システムを作り上げてしまったのだ。

戦後の自由な教育は消え去り、教育集団も

管理化されていった。そのような時代の流れの中で、成績が全てであるという価値観が形成されたのである。

その結果、戦争直後の教育理念の逆の現象が起った。対人評価の基準は、成績価値に一元化され、子どもは、全人格的ではなく、部分的にとらえられるという。インパーソナル化傾向が生じたのである。そのような「一品主義」の中で、それが全てであるかのように錯覚している子どもたちは、遊びの時間を削って、ひたすらに勉強するのである。そして、一つの道しか見えない子どもにとって、道について行くことができなくなった時が問題なのである。開き直って反抗できる者は、まだよい。しかし、それができない者は、心の病いを患うしかない。偏差値・IQ値の存在をはじめとする、現在の学校制度、特に受験は、マスコミの報道や、家庭事情と重なって、本人の達成動機や要求水準を不必要に高めやすい。ところが、これが現実の能力を無視したものだと、その課題は満たされない。そうすると、強い不安や心的緊張が起こるのである。現代の学校教育の病理現象というべきものだろう。

また、最近では、高校中退者が増加している。高校進学率は、昭和56年度において、94.3%と高校全入時代の到来を思わせるが、入学後、40%が退学を考えたことがあるという。

学科別退学者数と全生徒に対する退学者の割合

	普通科系				職業科系						全	
	普通科	体育科	理科	小計	農業科	水産科	工業科	商業科	家庭科	看護科	小計	全体
男	246 / 1.7	0	0	246 / 1.7	110 / 6.4	50 / 9.4	72 / 3.6	43 / 3.5			275 / 5.0	521 / 2.6
女	111 / 0.7	0	0	111 / 0.7	19 / 2.2	0	2 / 6.3	18 / 1.1	17 / 1.2	2 / 2.4	58 / 1.5	169 / 0.9
計	357 / 1.3	0	0	357 / 1.2	129 / 5.0	50 / 9.1	74 / 3.6	61 / 2.2	17 / 1.2	2 / 2.4	333 / 3.5	690 / 1.8

それは職業科と新設校に多いが、この現象も、今の一品主義の煽りを受けているのではないだろうか。偏差値等による輪切り教育は、学習意欲の転覆の危険性を孕み、「とにかく高校だけは」という無目的入学は、無気力を

生むのである。

一般に社会機構が、複雑・巨大化するほど、人間関係はインパーソナル化されるが、教育集団もその中で、インパーソナル現象を作り出したのである。思春期病の要因が、ここに

も見られるわけだが、学習指導に終始せず、人生観をしっかり育てる教育内容の充実が必要であろう。また、教師自らも、一品主義を捨てて、子どもを全人格的にとらえる姿勢が必要である。さらには、家庭・マスコミ等も、子どもの将来について、広い視野を持つことが、大切である。

第2章 マスメディアが人格に及ぼす影響

1. テレビに育てられる子どもたち

現代社会はまた情報化社会である。マスメディアの発達により、人々はみな、様々な情報を、手にすることができる。しかし、そのような中で、むしろ人間が情報に惑わされているような気がするのである。情報があふすぎて、それらに引き回される人間。人間の方でも、選択できることができずに、むしろ常識とさえいえるものまで、偽の情報によって判断できなくなっている。最近の育児ノイローゼや、性の低年齢化は、その典型であろう。まさに、マスメディアによる人間支配である。

マスメディアのうち、子どもに最も大きな影響を与えるのが、テレビである。テレビを見ることは、日常の習慣であり、情報源である。しかも、それはスイッチ1つで、何でも見ることができるのだ。子ども向けの夢のある番組ばかりではない。大人の番組では、暴力・性で溢れている。子どもはスイッチ1つでそれを見て、学ぶのである。特に小さい子どもほど、ブラウン管の中の出来事と現実の区別をつけにくい。時には暴力を「かっこいい」と憧れたりもするだろう。家庭内暴力や校内暴力、非行を「かっこいい」と思うのも無理はない。最近のティーン向け雑誌の投書を見ると、「つっぱり」がかっこいいと思っている子どもも多いようである。

テレビは、スイッチを入れたら最後で、子どもに情報を与え続ける。その結果、子どもは自分に不必要な情報まで、取り入れてしまうのだ。つまり価値観を外から押しつけることでもある。自分で、様々な人間経験の中

から、価値観を育てるのは、意味が違うのである。何よりも、テレビに対して、子どもは受身の姿勢のままなのであるから。

テレビは過剰な情報を与えるかわり、発達にとって最も大切な情報である、家族間のコミュニケーションを奪ってしまう。コミュニケーションによって満たされるべき、子どもの基本的要求は、テレビに吸い取られてしまうのである。本来、母親の行うマザリングが失われれば、子どもの情緒は安定することができない。情緒障害すら引き起こすことができるのである。テレビをみて育ったある幼児の第一声が、「ゴキブリ・ゾロゾロ」というCMのフレーズであったという報告には、現代の歪みを見る思いがする。

テレビが育児をするようになれば、「知・情・意」という人間独自の心理は、崩れてしまう。テレビ＝育児は極論としても、アタッチメントを中心とする、コミュニケーションの喪失は、確かに現代社会共通のものとして、多かれ少なかれ存在するのである。全ての子どもに情緒的発達阻止要因が、呈示されているのである。

学習や知覚に及ぼす影響は、どうであろうか。テレビは様々な情報を流すが、もちろん子どもはそれら全てを理解できない。極めて断片的で、内容の不確かなものである。受身的にそれらを得るため、想像力は不要であり、その結果、情報の処理という知覚能力に支障が生じる。視覚的刺激に対して受身であることは、言語刺激への反応を弱めることになるであろう。活字離れはその結果である。活字離れは子どもから思考（空想的遊戯などを含む）を奪い、その知覚的成長、情緒の豊かな発達、創造性の芽をつみとってしまうのであるから、問題は大きい。さらに欲求不満附性の欠如の問題があろう。たえず画面の変化する刺激は、子どもの注意力を低下させ、待つことを教えないのである。

テレビによる情報は、多くがステレオタイプであり、偽りのイメージを子どもにプリンティングしてしまう。また、発達は段階的に

行われる以上、その過程で与えられる情報も段階的であるべきだが、テレビは一度に与えてしまうのである。そこに情報に惑わされ、心理的混乱を深めていく原因があるのだろう。そして、自己意識についていえることは、ステレオタイプの情報を内面化しても、本当の自我育成はできない。かえって達成要求を必要以上に高めてしまう可能性もあり、現実との差が大き過ぎると、思春期の混乱をきたす結果にもなりかねないのである。

2. 情報過多社会とアイデンティティ

マスメディアの発達には眼をみはるものがある。戦後のそれは戦前とは比べものにならない。テレビ・新聞・ラジオ・雑誌等々。それら様々な手段によって、膨大な量の情報が流れる。それは、子どもにどのような影響を及ぼすだろうか。まず、思春期の子どもは、自我の形成過程にあり、不安定な価値状態にある。マスメディアによる判断基準が呈示されると——それは、一般化された他者として、子どもに錯覚をおこさせる——社会的リアリティとして、それを受けとり、自分の判断基準としてしまう。これは特に性についての価値観についていえることではないか。それら情報の波が、心理的混乱期にある子どもたちを直撃し、非行その他の問題を引き起こすのである。

マスコミとは、コピーの世界である。必ずしも真の情報とはいえないし、個人にとっては、実に頼りないものである場合が多い。一部の情報のみをコピーすれば、あたかもそれが全体のコピーであるかのような錯覚を与えてしまう。アイデンティティの未確立は、何が正しくて何が悪いのか、という判断基準を曖昧にし、価値観の多様化がさらにそれに拍車をかけるのである。たとえば、受験戦争の中で思春期病となった子どもは、マスコミの「成績崇拜」に惑わされているのではないか。

特に女の子の場合、マスコミで紹介されるのは「自立した女」か「専業主婦」の2つであり、それが全てだと錯覚してしまう。自分なりの人生を充実させることに気づかないの

である。その結果、受験体制から降りて、登校拒否、非行、自殺などの精神的トラブルを起こすのである。また、マスメディアによる性の解放現象の報道は、一部の事実を拡大コピーしているわけであるが、それを全てと錯覚させる力を持っている。性の低年齢化が問題となっている現在、虚を实と思い込ませている子どもが、マスコミに惑わされているのである。さらに、マスコミの流す青年文化は、享乐的で華やかなイメージを与える。それは「今」の楽しさを追求するものであり、その虜となると転落する可能性もある。現在9割以上の高校進学率は、反面に多くの無目的の入学を生んでいるが、そのような者にとっては、さらに悪い影響を与える恐れがあるのである。

マスメディアの情報と、実際の自分の間のギャップが大きいほど、焦りを覚え、短絡的行動に出てしまう。逆に、無気力ともなり得るのである。マスコミによって得られる情報は、意識に働きかけ、ステレオタイプの判断基準をつくりあげてしまう。しかし、実際の行動が伴わない時、人格は不安定となって行くのである。意識と行動は、対応してこそ、人格の安定を得られるのである。

第3章 発達加速現象と思春期病

1. 発達加速現象とエリクソンの発達説

思春期病の原因として、よく挙げられるのが、心と身体のアンバランスの問題である。つまり、身体的・性的発達は、時代と共に早まっており、反面、心理的・社会的発達は、逆に遅くなっているのである。その結果どうなるか。児童期の短縮、即ち思春期の早い到来が身体的には起る。エリクソンのいう「危機」が訪れるわけだ。ところが、心的にはまだ、児童であるために、それまでにとり入れた同一視を再評価、再体制化できずに、「青年期」に入ってしまうわけで、アイデンティティが確立されないのである。少年期に、本人の弱点なり、性格の偏りなり、内面の矛盾なりが改善されずにいると、思春期病などの問

題が起こるのである。

最近の子どもは、体格も向上し、身長伸びも早い。第2次性徴も早まっている。栄養の条件が体位の向上を促し、テレビや、マンガなどの雑誌による性的刺激が、第2次性徴の早期化傾向に、一役買っているのであろう。一方、結婚年齢は上昇しており、その原因には、様々な要因が考えられるが、その一つとして子どもの親からの精神的離乳が、できていないことが挙げられるはずである。身体や、知識面の発達加速とは逆に、精神面での遅滞が目立つのは、大学受験や入社式にまで、つき添う母親が存在することでもわかる。もっともこの場合、親の方でも子離れしていないことになるが、これに関しては、他章に譲る。とにかく、この心の発達遅滞が、親への依存と子どもへの過保護を招くわけであるが、それは次のように解釈できると思う。

明治、大正時代は、人々の学歴水準は今ほど高くはなく、高等小学校を卒業すれば、奉公など、仕事に就くのが普通であった。それだけ社会の厳しさに早く直面せざるを得なかったわけで、生活のために働らき、贅沢などいえないで、子どもらしい遊びの中で、成長していったのである。ところが現在は12年制教育の普及、引いては高校進学率が9割を超えているという事実から、子どもが社会に出るのが遅くなった。家庭という、自分中心の王国の中で、子どもは甘え放題、わがまま放題も可能になり得るわけで、身体の発達加速の反面、心の成長の遅滞に拍車をかける条件が、ここにも成立するのである。

ハヴァーガーストは、彼の著作の中で Developmental Tasks (発達の課題) について述べている。これは、人には各々の発達段階に応じた課題と成長がある、というもので、たとえば離乳が早すぎると、神経質な子どもになるという。また、E. H. エリクソンも「自我の8段階発達」について、ハヴァーガーストと同様の事象について述べている。彼らの発達課題を一昔前にあてはめてみると、「子どもは遊び、中学生は淡い初恋、高校生は将来

の進路選択」(深谷昌志著『孤立化する子どもたち』から引用)という段階的発達が要求されていたのであり、大体その通りに成長していった。

ところが最近では、ハヴァーガーストやエリクソンのいう Developmental Tasks が失われてきているのではないだろうか。小学生から高校生まで勉強と習いごとに手一杯で、余った時間もテレビやパソコンという単一的、画一的生活である。あるいは発達加速現象によって、小学生時代から性に目覚める反面、大学生になっても親離れできないほど、成長段階の節目があいまいになっているのだ。そうならば、心の正常な発達を期待する方が無理なのではないだろうか。そのように、発達加速現象は、発達課題もしくは8段階発達を、根底から崩す一面をもち、ともすれば、心の発達をおきざりにしてしまう危険性をも併わせものである。

2. わが国の発達加速現象と思春期病

発達加速現象については、1935年ごろから世界中で指摘されるようになった。わが国でも、人類学者の長谷部言人が、その現象を、「遺伝学における躍進現象 (Transgredieren)」と表現し、ロンドン大学の J. M. Tanner は後にそれを「最近の人間生物学の諸知見の中でも、最も衝撃的なものの1つ」であると記した。当時は「時代的傾向」「時代的变化」、あるいは“Ertwicklingswandelung”(発達推移、発達の彷徨) などとも称されたが、結局、C. Bennholdt-Thomsen により“Akzeleration”(発達加速現象) と命名された。現代の人類の構造変化として、注目されたのである。

発達加速現象には、文明の近代化が大きく寄与する。ヨーロッパにおいてこの現象が顕著になったのは、1840年頃からである。これは、産業革命の結果として、生活様式が進歩したためではないだろうか。日本でも同様のことがいえる。身長についていえば、弥生〜古墳時代の成人男子は162 cm と、縄文時代のそれを数センチだけ上回る。近代化とはいえないが、弥生時代とは、それまでの石器時

代、狩猟採集時代から、金属器時代、農耕定住時代へ、大きく文化が変化した時代である。また、明治以後は、西欧文明の影響で、これも急激な生活様式の変革を経験している。このように文化が人間の形質に与える影響は、巨大なものであり、それとともに、心的加速への影響も、測り知れないものがある。

明治以来、身長は漸増が続いていたわが国は、昭和23年を起点として、その急激な上昇を見せ始めた。いわば加速の激化とでもいうべきものであるが、第2次世界大戦、そして敗戦という心理的ストレスが、従来からの発達加速に拍車をかけて、「反発効果」を生んだと見ることができる。つまり、戦中・戦後（直後）の社会的混乱、経済悪化、生活水準の悪化などが、子どもの当然の発達を阻害し、成長の遅滞を招いていたものが、やがて昭和20年代の後半になって、社会に秩序と好転が戻ると、「遅れ」をとり戻すべく、復元力を働かせたのである。それは本来の発達の発達加速現象とあいまって、戦後特有の回復速度を現出したわけである。そしてこの時期は、思春期病の現われた時期の子どもが、誕生した年代でもある。登校拒否児についてみても、「登校拒否」という言葉がはじめて使われたのは、昭和35年頃であり、そのころから従来の「長期欠席」とは異質の「登校できない」子どもが、報告されだしている。

3. 発達加速と思春期病の成立要因

同一世代間の比較（民族差、地域差、階層差、家族差などで示される発達速度の差）を通して得られる差異のことを発達勾配現象というが、ここでは地域差＝文化差について考察してみる。結果からいうと、「都市中心的発達勾配」という大都市傾向の発達加速となっているのである。都市は郡部に比べて、消費水準が高く、生活の近代化も著しい。近代的文化と、伝統的文化の差異が成長に影響を与えていることとなる。

近代化という点から眺めれば、戦後の社会を見ても、昭和20年代の復興期、30年代の経済成長と工業化に伴い、身長も伸びているの

である。即ち、社会の繁栄が国民の所得水準を引き上げ、生活水準を向上させたのだ。敗戦による急激な文化変革の洗礼を受け、生活革命が進んだ。都市は、大勢の人間で一杯であり、自動車の普及により、都市の交通は危険度が大きくなっている。色とりどりのネオン、広告、商品があふれ、絶えず騒音があるのだ。それらの過剰刺激が、人間に対して、心理的に負荷を与えている。そうした刺激によって、神経過敏・ストレスなど、心理的に負担がかかり、心の病いの下地をつくる。一方、そのような都市の刺激過剰は、人間の視床下部に中枢をもつ自律神経系・血管運動系に一種の負荷を与え、その結果、性成熟の早期化傾向を生むことが指摘されている。

さらに、都市では、第3次産業就業人口が多数であり、郡部など地方では、第1・第2次産業就業人口が多いことも、文化差に寄与しているといえよう。都市は常に異質的・変動的であり、それが、人間に心理的・生理的緊張を与えているのだ。

発達加速現象が、文化や社会状況に左右され、心理的にも影響が大であることは、先に述べたが、発達加速のおかげで子どもの成長は急速になった。乳歯初生、完了ともに半年位は早まり、永久歯完了においては、3年近く早まっている。いいかえれば、離乳の時期がそれだけ早まっているのであり、発達過程において重要なスキンシップが減少してしまうのである。当然、神経過敏、情緒不安定などの原因になる。また、永久歯の初生時における脳重量は成人の90%まで達しており、視力や聴覚の発達加速と合わせ考えると、それだけに小さいうちから、刺激を受け、学習を開始するわけで、知能発達も、それだけに加速される結果となる。その知能上昇は、先の都市化要因とも関連して、言語的なものよりも空間的なもの、正確さよりも速さの面でのものであり、精神活動との間に、隔りを生んでいる。知能を含めて、身体の発達加速は、実際の精神年齢加速よりも、スピードが、はやい。思春期病の原因とされる、心身の不均

衡が成立するのである。身体の早熟は、心理的成熟までの期間を拡大し、心理的混乱を長びかせ、さらに大きくする。思春期の危機を迎えるには、それ相応の精神年齢に達していることが必要であるが、その年齢に達しないうちに、身体だけ先に思春期を迎えてしまえば、思春期病になる可能性も、それだけ高くなるに違いないだろう。

さらに児童期は、親への完全依存から脱却し、自分の感情が発達し、他者のなかでの自分、つまり社会性を学ぶ時期である。価値観ができ、人格発達に重大な影響をもつ時期なのだ。発達加速により、思春期発現が早まるということは、この重要な児童期の短縮にはかならない。極端にいうならば、親から分離ができないまま、社会性を育てることなしに、自己中心性を残したまま、正常な人格発達をとげずに、思春期へ突入してしまうのである。少年少女期に発達課題を解決しておかないと、思春期病や自殺などの問題が起こるといえるのは、まさにエリクソンも指摘していることである。現在、世界中で指摘されている発達加速現象は、近・現代の特徴ともいわれているが、ここでは思春期病の一要因として、取り上げた。

第4章 ヒューマニズムの立場からの解明

1. 戦前と戦後の父親像

戦前の家制度は、父親と母親の役割バランスにおいては、平衡を保つのに役立っていた。母性原理は、強い父権という社会的構造とともに、厳しい父親、それを庇う優しい母親のイメージを与えていたのである。ところが、戦後その構造が崩れ、母性原理のみになってしまったのである。戦前は、第一次産業に就いている父親が多かったため、子どもは働らく父親の姿を見ながら育った。子どもは父親を通して、社会化の基礎をつくり、権威への態度を学習し、男女の役割を学ぶことができたのである。パーソナリティの形成過程において、これは重要な機能である。さらに青年期には、父親という権威を非常な努力をもっ

て乗り越え、反抗をもって自我を形成することもできたわけである。

それに較べて戦後はどうか。経済成長に伴ない、第二・第三次産業に就く父親が大部分を占めるようになった。その結果、父親は自宅で働かなくなったので、子どもは父親の役割や仕事を理解できなくなったのである。たとえば、農業に従事していたら、父親が一家の先頭に立ち、全てに責任を持って決定して、指示を与え、自ら働らいている姿を子どもに観察させることができたのであるが、現在では、多くの子どもが、父親の仕事や存在について、具体性を欠いているのである。

戦前の法律で保障されていた父親の権威は、民法改正とともに奪われ、女性の地位、引いては母親の権威の増大により、ますます弱いものとなる。核家族化や、女性の高学歴化が、それに関係していることも確かであるが、とにかく、子どもの前での存在は薄い。家庭教育を考えた場合、この父親像は、果たして何の役に立つのであろうか。

現代の父親は、子どもの躾や教育を全て母親任せにしている傾向がある。子どもの模倣観察モデルは母親のみとなってしまう。また、下手をすれば、父親も子どもの前で強い母親に叱りとばされるわけで、子どもにとって父親は、マイナスのモデルとされてしまうのだ。社会の一員として成熟している大人の男性によって、子どもは社会化されなければならない。自分自身の判断、行動を学ぶ対象として、父親の果たす役割は大きいのである。父親不在、もしくは、いても存在感が薄い家庭には思春期病の子どもが多いが、これも、同一視すべき父親の不在、女性（母性原理という甘え）のみによる社会化の結果であろう。

観察学習のモデルとして、現在の父親は適切ではないが、特に男の子にとって影響が大きい。夫婦の勢力構造によって、子どもの社会性発達が受ける影響を見ると、女子では殆んど差がないのに、男子では妻優位型家庭において、社会性発達の遅れと非社会性が目立つのである。身近かに同一視の対象が無い男

子青年は、社会性の遅れとともに、成長意欲を失ってしまう危険性をも孕んでいるのである。

社会構造の変化に伴う父親像の変遷は、以上の通りであるが、文化の側面から見た父親はどうであろうか。1960年代は、戦前と戦後の世代間差異を見るのに重要な時代であると思う。高度経済成長の下、国民生活の安定とともに、私生活に埋没したマイホーム主義という価値観が現われてくる。また、ユース・カルチャー（youth culture）が登場し、既存の価値体系を否定、拒否するという反逆現象が現われたのも、この時代である。このユース・カルチャーの特色は、①役割における無責任さと享楽主義。②価値基準における性的魅力の重視（職業上の能力ではない）。③成人に対する反抗・否定——の三点に集約されるが、1955年来、文学作品にこのユース・カルチャーの主張が行なわれ、ドライな合理主義や無責任な刹那的人生観が現われてきたことは、青少年の生活態度に多大な影響を与えたと思われる。

戦前の目標が、立身出世であったことを考えると、このユース・カルチャーの中で育った青少年が、父親となったこと自体、父親像の変化を必然化するものであろう。この傾向は現在まで受け継がれ、昭和56年8月の総理府調査によれば、生きがいとして「友人や仲間と一緒にいる時」が58%でトップであり、「仕事や勉強」(24%)、「社会への貢献」(7%)、は少数派である。暮らし方としては「趣味にあった」(56%)、「その日その日をのん気に」(17%)など、個人生活重視型が4分の3を占めている。この調査対象は、15歳から23歳までの男女3000人だが、戦前の仕事一本の父親なら、青年期もそのための準備期間として厳しく過ごすであろうことを考えると、文化差のもたらしたものは大きい。現代の父親は弱くなったというが、弱くなったというより、ゴーイング・マイウェイ型になったため、子どもに対しても、そのような態度で接するようになったのであると思われる。

父親の変化として、存在感の他に、パーソナリティの変化をも挙げたが、このことの中には、また、父親が優しくなったことも含まれる。かつてのような厳しさ一辺倒ではなく、優しさを増している。これは、父親に対して、子どもが感情的な反発を示しにくくなったことを示し、第二次反抗期、すなわち心理的離乳の喪失を招く結果となっているのである。

さらに、一人前の男性として行動できない夫の増加も、挙げられる。母親から心理的離乳のできていない青年が結婚し、父親になるという悪循環である。妻は依存心の強い夫より、子どもに期待をかけ、その結果、母子未分離を招いてしまうのである。夫婦中心のアメリカ人と異なり、日本の家族は親子関係中心であるため、この傾向は当然かもしれない。

2. 戦前と戦後の母親像

子どもにとって母親は、誕生後、最初の人間関係の対象であり、自分を養育してくれる、最も重要な人物である。子どもの発達において、母親とのかかわりが、情緒を中心とした人格形成に、重大な影響を及ぼすことは、いうまでもない。母性とは、社会心理学的・生理学的・感情的統一体としての、母の子に対する関係を示すものであり、受胎とともに始まり、その後の妊娠・出産・養育の生理的過程を通じて続くものだが（H. Deutsch）、その母性が、変化してきている——というより、むしろ失われてきているようである。

社会的環境の変化は、母性行動をも、変化させた。昔は天からの授けものであった子どもは、今や科学の発達により、人為的に操作されて、生まれさせられる。他人の都合で生まれてきた子は、親の「私物」となってしまったのだ。1人の人間として見るのではなく、自分の「モノ」なのである。子どもは、親の思い通りに育てられ、依存心を捨てきれないまま成長してしまうのである。

社会の風潮も、母性の神秘性を奪ってしまったといえるだろう。元来、育児とは一大事業のはずだが、それを面倒に思う母親が増えているのではないだろうか。粉ミルクでは、

母親とのアタッチメントを望めない。戦後、アメリカ文化の影響で、乳房がマザリングのためではなく、性的シンボルに変わってしまったこともあるが、子どもの情緒安定のために一番適切である母乳による授乳が行なわれなくなってきたことは、子どもの発達に出发点から障害を与えていることになる。

最近流行している育児用の紙おむつは、外出などの場合は便利だが、常時使用していると鈍感になるという。母親の自覚が足りないようである。抱き癖がつくから、などといって子どもを抱かないのも、疲れるから、面倒だからではないのか。マス・コミ等によって得た誤った情報（もしくは、母親が誤った形で受けとめた情報）によって、正当化しているのかもしれない。昔の母親は、子どもをおぶって家事をこなした。今はベビー・ベッドに入れっぱなしというケースが多い。スキップの減少は、情緒の不安定をもたらす。

子どもの私物化とともに、子どもよりも一人の人間としての自分の方が可愛い、未熟な母親の増加が、子どもの健全な発達を阻害する一要因といえるだろう。母子関係の阻止は、母性の未熟さに起因する。では、なぜ母性が未熟なのであろうか。スウェーデンのシャトーの行なった実験によれば、①新生児に産湯をつかわせた後、母親の後産がすんだ頃、2時間ほど母親のそばに置いて、新生児室に連れていく。②生まれた直後、産湯をつかわす前に、赤ん坊を母親のお腹の上に5分位乗せる。次に臍帯を切断し、赤ん坊を横抱きにさせ、乳をふくませる。その後、はじめて沐浴——という2通りの方法だが、母性行動に差をもたらすことが明らかにされている。①では、母親の目の前に赤ん坊を差し出し、「これがあなたのお子さんですよ」と現実には抱かせないと、抱こうとしない。ところが②では、自分の子の泣き声がすぐにわかり、その姿もすぐ識別できる。そして、積極的に抱こうとするという。

昔と違い、現在は殆どどの妊婦が病院で出産する。病院での出産が、上記の①の状態で

あることを考えると、母性的自覚もなかなか望めないであろう。中には苦痛を嫌って、わざわざ帝王切開をしてもらう妊婦もいるという。このような育児の心構えの未熟さや育児に適していない心などが、心理的に健全な発達のできない子どもをつくってしまうのである。また、テクニックの問題として、最近は母性行動を観察する機会が少ない。これは兄弟数の減少、および核家族化された家族が血縁・地縁集団への閉鎖的態度をとるようになったこと、などが主な原因だが、育児に関して無知であり、道具や数値等に関する情報ばかりを仕入れると、誤った育児を行なう結果となってしまう。隔離ザルが子育て不能なのと、同じなのである。育児は学習であり、伝承なのだ。

戦前と戦後を較べて、母親の違いがもう1つある。それは高学歴化である。思春期病の子どもを持つ母親は、たいてい母親の方が理知的で勝気である。学歴の高い両親の間でできた子どもは、どうしても母親の枠組みを押しつけられ、親の意向、期待に合わせて育てられてしまう。その結果、パーソナリティの柔軟性や成熟性を養えないのだ。要するに、母親による子どもの私物化が、悪い形で愛情過多を生みだし、高学歴化が母親基準の価値——偏った愛情——という形で現れるのであろう。

母子未分離、つまり子が親から離脱できないと同時に、親自身も子どもから離れられない現象は、さらにそれに拍車をかける。日本の母親は子に一体感を抱き、アメリカの母親は、夫に一体感を抱く。この観点から見ても、母子未分離は、日本では必然的なものであり、親の子どもに対する過大な期待も納得がいく。つまり、アメリカでは、親と子との間に躰を通して、いくつかの約束関係が生まれるが、日本では逆に母子間の一体的関係を通して、躰をするのである。躰とは、それをする側とされる側が、はっきり別れていて成立するものだが、日本の母子未分離の状態は、躰関係を見きわめることを困難にする。

母子一体化の度合いが大きいほど、親子の社会的距離が接近し、相手が子どもである事実を忘れて、親の価値観を押しつけ、過大な要求や期待を強いる結果となるのである。このような母親が、子どもに幼い時からその枠組みを押しつけ、「小^{リトル・ジェントルマン}紳士」風の育て方をしやすい。そして子どもが思春期になると、暴力などの形で噴き出す素地をつくっているのだが、母親自身はそれに気づかない。母子相互の依存関係が強すぎるために、母親は自分と子どもとの区別がつかなくなり、子どもは自分と同じ考え方をしている、などという錯覚を生じたりする。

女性の学歴は高くなり、社会進出も眼ざましい。しかし、社会人としての成長は、必ずしも母親としての成長ではない。高学歴は、日本に從來からあった母子未分離に、悪い影響を与えた。また、知識は豊富でも、それを役に立てている母親が少ないのではないだろうか。極端かもしれないが、客観的に見て、身勝手な母親が少なくないように思う。自分は手を抜いて、子どもだけに努力をさせるのも、今回調べているうちに、浮び上ってきた1つのパターンである。

以上、様々な人間関係が、子どもの心理に与える影響を考察してきたが、共通していることは、コミュニケーションが、正常に行なわれていない、ということである。人間は誰でも、自分が認められたいという要求を持っている。そして、他人とのコミュニケーションを営むことは、その要求を満たし、やがて親密な人間関係をつくりだすのである。思春期病の子どもは、自我が未発達のため、コミュニケーションも未熟である。その不満が蓄積し、そして爆発してしまう時、親達は、自らの非に気づかず、学校との間に、責任のなすり合いをする、という図式が出来上がっている。まわりの大人たちの未熟さが、子どもの自我を未熟にしてしまうのではないだろうか。もっと親子間で、また、教師—生徒間で、片流れでない真のコミュニケーションを成立させることが、思春期病への対応策といえる

と思う。そうすれば、自分が受容されたという満足感を子どもは持つ。そのような安心感は、内的自己の表出を促し、心の成長となるのである。

参考文献

- 1) モーリス・ドベス著、吉倉範光訳：青年期、白水社（1969）。
- 2) 深谷昌志：孤立化する子供たち、日本放送出版協会（1983）。
- 3) 市岡典三、柴田省三、松元泰儀、小林赫子：家出の心理、有斐閣（1982）。
- 4) 井上敏明：心のカルテ、朱鷺書房（1980）。
- 5) 久世妙子、勝部篤美、山下富美代、住田幸次郎、水山進吾、繁田進：発達心理学、有斐閣（1978）。
- 6) ケイト・ムーディ著、市川孝一監訳：TV症候群、家の光協会（1982）。
- 7) 永丘智郎：新版／ヒューマニズムの心理学、杉山書店（1984）。
- 8) 佐々木保行、高野陽、大日向雅美、神馬由貴子、芹沢茂登子：育児ノイローゼ、有斐閣（1982）。
- 9) 佐治守夫、福島章、越智浩二郎編：ノイローゼ——現代の精神病理、有斐閣（1976）。
- 10) 澤田昭著、前田嘉明編：現代青少年の発達加速——発達加速現象の研究、創元社（1982）。
- 11) 詫摩武俊、石井富美子、田村雅幸、勝俣暎史、滝本孝雄、村武精一：思春期の心理、有斐閣（1978）。
- 12) 玉井収介：登校拒否、教育出版（1979）。
- 13) 東京都精神医学総合研究所：思春期暴力、有斐閣（1983）。
- 14) 山口透編著：現代青少年の性、高文堂（1981）。
- 15) 依田明：家族関係の心理、有斐閣（1978）。
- 16) 依田明：母子関係の心理学、大日本図書（1982）。
- 17) [雑誌] 教育心理、31（8）、日本文化科学社（1983）。